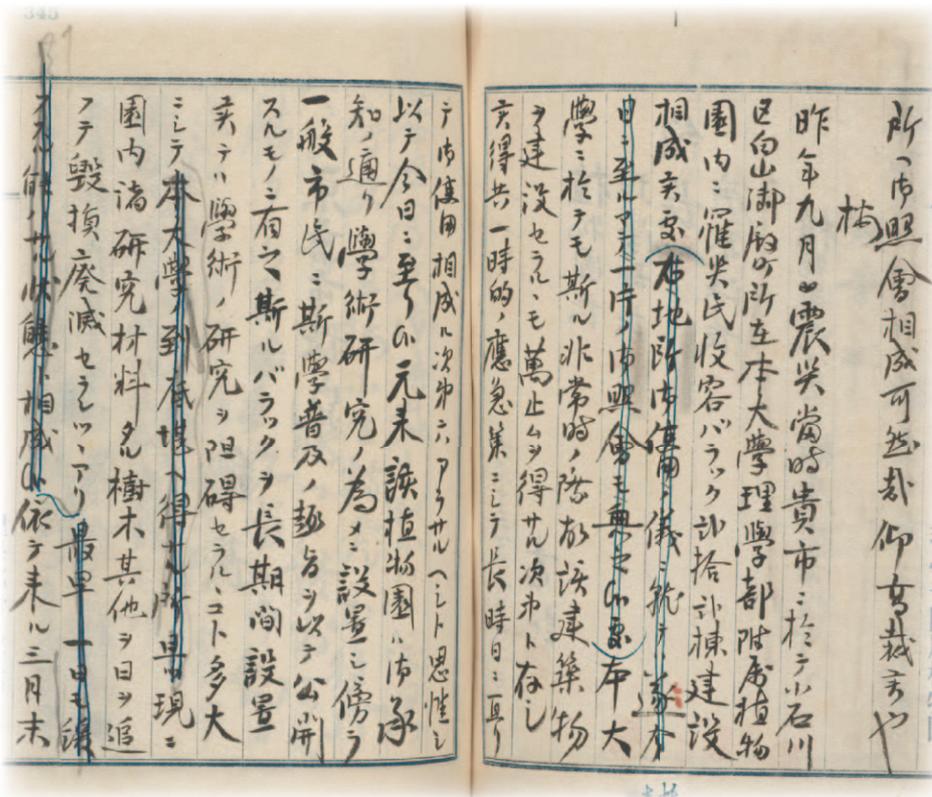


東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 70, Mar. 2023

関東大震災から 100 年 — その時、小石川植物園では —



S0003/40 『官庁往復』大正十三年
「バラック撤廃方市役所へ照會ノ件」

本学理学部が所管する小石川植物園。

震災当時、罹災者を受け入れる建物（バラック）が一時建てられました。「非常時ノ際故該建築物ヲ建設セラルモ萬止ムヲ得サル」としながらも、「園内諸研究材料タル樹木其他ヲ日ヲ追フテ毀損廢滅セラレツアリ」として、非常事態への対応と研究施設本来の役割との間でせめぎあひながら、翌大正 13 年 2 月 21 日、植物園が、バラックの撤廃を願い出たのです。

数回にわたる願い出の結果、同年 12 月 25 日を最終期限として居住者に立ち退きの通告をする、との文書が、東京市社会局から本学総長宛に届きました。

+++ 当館デジタル・アーカイブで画像を公開しています +++

Contents

- 2 東京大学百五十年史担当任のご挨拶
中西 啓太
- 4 紙資料を中心とした保存管理の成果と課題
秋山 淳子
- 6 資料の公開について
- 7 業務日誌（抄）
（2022年8月～2023年1月）
- 8 文書館トピックス
イギリスの医療アーカイブを訪ねて
森本 祥子

YouTube 新コンテンツ公開！
（2022/11/14）



東京大学文書館
デジタル・アーカイブの使い方

<https://www.youtube.com/watch?v=OdLSMjsSank>

東京大学百五十年史担当着任のご挨拶

東京大学文書館 准教授 中西 啓太

初めてゼミで研究報告を行った頃から此の方、「文書館」にはお世話になりっぱなしである。と言っても、その第一歩は埼玉県立「もんじょかん」であった。

まだ日本近代史の研究に足を踏み入れたとまでは言い難い当時、ともあれ専門として自分の研究をしていかねばと史料を探していた筆者は、研究室の先輩の助言で文書館の存在を知り、ホームページからの充実した検索機能にも助けられ、「ひとまず行ってみよう」と一歩目を踏み出すことができた。そうして一歩一歩進んでいるうちに、2022年10月より東京大学「ぶんしょかん」にお世話になることとなった。これまでの勤務校とは桁違いに大きい大学の規模に、筆者はまだまだ面喰らいながら過ごしている最中だが、そんな巨大組織の中であって、アーカイブはどのような機能・役割を期待されて、歩んでいくのだろうか。現状では、筆者が書けるのは文書館を利用してきた一個人としてのエッセイに留まるが、主たる職務となる『東京大学百五十年史』編纂への抱負と合わせ、着任のご挨拶に代えさせていただきたいと思う。

明治から大正にかけての地方行財政や、そこから広がって地域社会・経済を主な研究対象としている筆者は、とにかく各地の文書館に通い詰めであった。大量の史料をその場でノートパソコン上に情報整理したり、じっくりと読みたい史料はデジタルカメラで撮影をして持ち帰ったり、シャッターを切り続けているうちになぜかカメラが史料を顔認識したことにフフッとひとり笑いを漏らしたりと、そんな学生時代であった。特に通い詰めであったのが修士論文の執筆の時期で、埼玉県立文書館と群馬県立文書館で明治期の市町村条例を悉皆調査し、論点を探し出すことに取り組んでいた。東日本大震災の大きな揺れも、閲覧席で経験した。

半ば体力任せで研究生活をスタートさせていたため、いま振り返ると、来館のたびにドカドカと大量の閲覧申請を出してご苦労を掛けていたことと思う。多くの文書館で、一度に出納できる史料の数は5点あるいは10点であろう。しかし、同じ規定であっても、群馬県立文書館では目録上1点の史料として番号が振られている場合も、現実に分割されている簿冊それぞれに振られた孫番号に合わせ、物理的に最大10点ずつの出納となるのに対し、埼玉県立文書館ではあくまでも目録上の番号での最大10点を、簿冊が分割されていたとしてもすべて出納してくれるため、時にこちらの意図以上に大量の簿冊を運ばせてしまうことにもなる。初心者の方は逆に、充実した件名検索に頼りきって上限10点の閲覧申請をプリントアウトして提出したところ、実はすべて同じ簿冊に収録されている文書だったため1点の史料しか出納されてこなかった、といったこともあった。そんな些細なことも現地に足を運ばなければ経験することはでき

ず、時に失敗しながら最適な利用を習得していくものである。

こうした様子は、くりかえし訪れる利用者が利用者として育っていく過程だと言うこともできるだろう。特に若手研究者に、東京大学文書館と質・量ともに優れた史料の存在とを知ってもらい、ヘビーユーザーへと成長してもらうことができれば理想的である。

また、文書館を利用するのは研究者だけにはとどまらない。とりわけ県庁のすぐ近くに立地している文書館では、研究者であるようにはどうも見えない利用者が数名連れ立って来館し、奥へ通されて公文書を閲覧していることがしばしばあった。どうやら行政による利用がなされているようで、前例や過去の来歴を文書に基づいて調べて行政を執行していく営みは、筆者が明治期の史料から再構成した100年以上前の官僚たちの行動と地続きのものだと考えることもできる。こうした働きを、文書館という場が支えているのだと実感させられる様子であった。

東京大学文書館も、ゆくゆくは本学においてこうした機能を担っていくことが期待される機関だと言える。組織としては2014年に設置されたばかりのまだまだ若い機関だが、2019年には基本組織規則の改正によりその規定が書き込まれ、附属図書館に準ずる全学組織となった。一連の整備の背景には公文書等管理法の規定があるという（大沢真理「東京大学文書館の改組の経緯」『東京大学文書館ニュース』63号、2019年参照）が、この制度的根柢を土台としつつ、機能の充実や役割の周知など、現在は草創から守成への重要な時期にあると考えられる。

そうしたタイミングにめぐってきた『東京大学百五十年史』の編纂・刊行は、社会に向けての発信であるとともに、教員・職員・学生という東京大学に直接かかわる人々にもっと本学への関心を高めてもらうチャンスでもある。これを主たる職務とする筆者も、『東京大学百五十年史』を文書館への入り口のひとつとする貢献ができるのではないかと考えている。なかでも、『資料編』の展開を、文書館への文字通り直接的な入り口として据えることが編纂室において構想されている。

たとえば自治体史などの場合は、『資料編』を刊行しつつ、そこには収録しきれなかった史料を含め、執筆に活用された史料を文書館などで所蔵していくことがよくとられる形である。これに対し、『東京大学百五十年史』はもちろん編纂過程において収集している史資料やインタビュー記録、データベースなども存在するが、もともと東京大学文書館が所蔵してきた史料も多いに活用されている。そこで、現状ではまだアイデアの段階に過ぎないことではあるが、『資料編』については『東京大学百年史』の際のように大部の書籍として発行するのは

なく、Web上での公開という方向を検討している。たとえば入学式・卒業式における総長式辞のような毎年更新されていくものや、東京大学全体あるいは各部局の改編などにもかかわる各種の規則だけでなく、『本編』を執筆する際に参照したさまざまな史料も当然収録されてくることになる。このうち、東大文書館が所蔵する史料については、デジタルアーカイブへのリンクを設定することで、『東京大学百五十年史』を読んで関心を持った読者をダイレクトに文書館へつないでいくことができないか、といったアイデアが出されている。『本編』は紙幅に大きく制約されるため、重要な史料であってもなかなか直接引用を大量に行うことが難しく、『資料編』へ移したとしてもその制約が存在することには変わらない。この点はデジタル上での公開とすればクリアでき、加えて文書館のデジタルアーカイブにつなぐ仕組みを作ることができれば、その原資料の閲覧や関連史料の探索へと読者を誘い、読者から利用者へと転じていく入り口になり得るのではないだろうか。かつての筆者のように、「ひとまず行ってみよう」と一歩目を踏み出す読者が現れることになれば幸いである。



史料撮影作業の様子

そのほか、百五十年史編纂室では現在、特任助教・特任研究員やオンキャンパスジョブの学生たちによる作業チームがさまざまな史料の収集やデータの整備に取り組んでいる。さまざまな部局の大学院生や留学生が多く携わってくれていることも、150周年へ向けた関心の高まりにつながると期待したい。基礎的な史料の件名データベース化に加え、『百年史』からの連続データとなる

事項だけでなく、50年前の時点では十分な論点になっていなかった事項を量的に追う基盤を作ることも目指している。これらのデータベースももちろん『資料編』として公開し、関連研究へ活用しやすい状態を整備したい。そのために、たとえば『本編』ではグラフ等で視覚的に示される数量データについて、Web上の『資料編』からは元データをダウンロードできるなど、刊行形態を活かした研究の便宜の図り方も考えたい。執筆された大学史を学術リポジトリ上で広く発信する事例は見られるが、ただ書籍を紙からWebへ移すという媒体の問題にとどめてはもったいない。デジタルゆえに、書籍という物理的な形態から解放された機能を発揮できる『資料編』となることが、多様な利用につながるだろう。逆に『本編』は、書籍ゆえに、順にページを繰っていった時に歴史叙述の醍醐味を味わえるような軸を有するものが期待されるだろう。そんな両刀を拵えることができればと夢想している。



百五十年史編纂室の様子

最後に、『百五十年史』とは、人間の寿命を考えればぜひとも取り組みたいタイミングではあるものの、誰もが口をそろえて区切りが良いと言う単位ではないだろう。それだけに今回の編纂は、『百年史』から遺産も課題も継承し、『二百年史』を展望してバトンをつなぐことも役割として意識したい点である。また、東京大学自身とそこに生きる人々の変化、あるいは東京大学と社会との関係の変化それ自体が歴史学として興味深い対象である。ここまで述べてきたようなアイデアを実際に形にすることはもちろん、何より大前提として、『百五十年史』が充実した内容で無事に執筆・刊行されることを目指していきたい。

紙資料を中心とした保存管理の成果と課題

東京大学文書館助教 秋山 淳子

東京大学文書館は2014（平成26）年の設置以来、所蔵資料の保存管理について実践を重ねてきた。そこでみてきた成果と今後の課題について概括し、開館後数年間の活動を評価したい。

1 施設上の問題点

本郷本館・柏分館の双方とも独立の専用建築物ではなく、学内共用施設の一部に「間借り」している。柏分館が入居する総合研究棟6F（図1）をみると、文書館書庫（緑）、閲覧室・事務室（濃緑）の廊下をはさんで隣接するエリアには、他部局の実験室・研究室（紫）と共用会議室（黄）があり、常時人の出入りがあると想定される。また、構造改修を伴う措置も実施できない。こうした施設上の制約を前提として、所蔵資料をいかに保存するか、最善の環境を考え、可能な措置を検討することが当館の課題となった。



図1：柏分館の平面配置（総合研究棟6F・部分）

2 IPMの取り組み

保存環境管理の基本方針は、将来的な資料の劣化・破損の原因となるものを取り除く「予防的保存」において、IPM（Integrated Pest Management・総合的有害生物管理）¹を主体として実施している²。

(1) 空間管理

資料管理段階に沿ったゾーニングと作業導線設計が基本であるが、当館では施設上対応は不可能であった。また書庫使用の部屋も一般研究室向けで、一面がガラス窓のため暗幕での日光遮蔽が限界であり、床も耐荷重の低いカーペット敷きオフィスフロアであった。問題点が多いが、同一階に収蔵庫と閲覧室を設置できる環境を選択したことになる。

(2) 資料受入処置

受入時対応として当初実施可能であったのは、ドライクリーニング・ボックス使用でのクリーニングと、スライド・チャック式ガスバリア袋による脱酸素処理であった。3連ファスナーで密閉する専用袋に脱酸素剤・酸素検知剤と資料を封入し、段ボール箱内で約3カ月間脱酸素状態（酸素濃度0.1%以下）を維持するという比較的

簡易な殺虫・殺卵方法である。導入コストが低く、専門的な管理が不要だが、効果判定ができないことが課題であった。そこで2021年度に専門業者の協力を得て、テント設置による炭酸ガス燻蒸を導入した³。現在、対象資料の分量に応じて年間1～2回を計画的に実施しており、判定により十分な効果も確認できている。補助的に従前の簡易処置も併用しているが、大きな改善がみられた分野といえる。

(3) 保存環境の管理

書庫は一般的なオフィス構造、空調・照明設備であるため、周辺の影響を受けやすく、保存環境として整備が必要であった⁴。その後、継続的な温湿度・害虫モニタリングを基本に環境管理を行っている。

・温湿度管理

理想的な温湿度環境は、温度：22度・相対湿度：55%程度とされ、急激な変化は資料への負担が大きいため、避けるべきである。対策の基本は、データロガーによるモニタリングとフィードバックで、各書庫の数個所に機器を設置し、30分ごとにデータを記録、1か月単位で集計・分析をしている。これをふまえて既設エアコンとタンク式除湿機設置⁵によって対策しているが、試行錯誤を続けている。加湿は均一的処置の方法がないため実施せず、除湿機はタンク式であるため漏水リスクと排水作業コストが課題である。適宜、サーキュレータを併用しているが、次年度は除湿機を湿度検知器つき機材とし、設定した湿度範囲での自動ON-OFF稼働へ変更して、管理の簡易化を図る予定である。

・害虫対策

粘着トラップによるモニタリングとフィードバックが基本である。書庫内複数個所で計測を行い、1か月単位で集計、発生状況や種別を特定し、発生源（内部／外部）や特性（歩行性／飛来性、食菌性、湿潤／乾燥環境志向等）を分析、対策を検討する。そのため虫の侵入・捕獲方向の把握が必要であり、清掃時のトラップ設置位置・方向変更防止のため、設置個所の壁面に指示用画像を掲示している（写真1）。また外部侵入対策に出入口床の粘着



写真1：害虫トラップ設置個所の表示

シート設置が普及しているが、廊下は共用部であるため設置できず、内開扉のため室内も不適切であった。現在、扉下防虫ブラシのみで対応しているが、今後も検討を継続したい。

そのほか、博物館用 LED 照明への切替え、定期清掃の実施⁶、目視による観察などを併用し、書庫内環境の改善に努めているが、課題の多い分野である。

(4) 書架における管理

配架では中性紙製保存箱での管理もあるが、特定歴史公文書等は簿冊形式のものが多く、書架へ直接配架する管理方法の検討が重要であった⁷。

・棚はめ込み式保存箱

現在、書架一段全体を一箱で管理する棚はめ込み式保存箱を活用している（写真2・3）。防塵や日光遮断効果も大きい。観測の結果、箱素材（内部の資料自体も）の調湿機能によって、箱内温湿度変化の緩和効果が確認できた。この形式の保存箱の特徴は、棚単位で配架できるので出納が容易であること、書架延長をほぼ減じることなく箱内保管できることである。しかし配架状況の視認性が低下するため、箱表面のラベル表示や定期的な内部観察などに留意が求められるだろう。

・地震対策

棚はめ込み式保存箱設置は、資料の落下防止にも大きな効果があることが確認できた。また、耐震機構付書架⁸を併用しており、地震発生時の稼働を確認しているが、さらに検討が必要である。

(5) 専門業者との連携

専門的な処置や判断が必要な場合には、積極的に専門業者へ相談し、共同して処置内容を検討、実施をしている。前述の炭酸ガス燻蒸のほか、カビ損・水損資料のクリーニング・殺菌処理等は実績があり、次年度には配



写真2：
棚はめ込み式保存箱（外観）



写真3：棚はめ込み式保存箱（内部）

架が進んだ書庫に対し改めて環境調査を依頼し、書架の使用率上昇による環境変化を測定する予定である。また比較的詳細な実施報告書の作成を依頼し、館員へフィードバックして専門的知見の活用に努めている。

3 代替化と資料修復の取り組み

当館ではデジタル・アーカイブを活用した代替化を進めているが、これを前提とした「資料情報へのアクセス保証」を目的とした修復方法の検討を進めている⁹。相対的に低コストの修補となるため、資料群全体に対し利用可能な状態を継続的に維持できる方法として検討を重ねているが、併せて今年度は特定歴史公文書等総体の概要調査実施に向け、予備調査を開始した。概要調査によって劣化の度合い・緊急度を把握し、修復計画立案の基礎資料を得る目的である。これと利用ニーズとのバランスを考慮しつつ、順次処置を進めていく。

4 今後の課題

開館以来、所蔵資料全体に対する「予防的保存」方針のもと、モニタリング・分析・フィードバックというIPMの基本を中心に試行錯誤を重ねた、というのが実情である。デジタル・アーカイブズの強みを活かしつつ、施設上の限界から常に「できることは何か」「今なすべき処置は何か」を探り、考えられる有効で適切な技術を合理的に組み合わせることで実施した結果、一定の成果と根本的課題が見えてきた段階であろう。今後も継続的な観察・管理に努め、柔軟に対応を検討しつつ、総合的な保存修復計画立案へと歩を進めていきたい。

- 1 狭義には「文化財 IPM」。文化財虫害研究所『文化財 IPM の手引き』（2014年）等を参照。
- 2 第5回東京大学学術資産アーカイブ化推進室主催セミナー「紙資料の保存管理の実践」（2022年2月10日実施）、秋山淳子「紙資料の現物保存の実務（IPMの取組）」（<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003252>）を参照。
- 3 詳細は『東京大学文書館ニュース』第67号（秋山淳子「柏分館における炭酸ガス燻蒸導入」）を参照。
- 4 開館後の取り組みは、同前、第53号（村上こずえ「収蔵庫等における害虫モニタリング調査について」）、第54号（白川栄美「保存と利用公開のバランス」）に詳しい。
- 5 24時間稼働・排水可能な据付型除湿機は、施設改修が必要で導入できなかった。
- 6 東京大学環境整備チームに除湿機排水もふくめ協力を依頼している。同チームとは2016年以降継続的な協働関係にある（同前、第58号）。また人手で処置しにくい書架下清掃には、薄型ロボット掃除機を活用している。
- 7 書架選定では床強度の制約から集密書架導入ができず取容力の問題が残った。
- 8 地震を検知すると棚板が内側に傾いてスライドする機構がつけられている。
- 9 同前、第68号（花谷敦子「農部前身組織関係資料群（S0026）」への保存修復処置について）を参照。原本形態の復元を目的としない簡易的補修の実践例である。

資料の公開について (2022年8月1日～2023年1月31日)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

(新規登録資料群＝★)

※概要記述とアイテムリスト(目録)は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます(<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>)。

特定歴史公文書等

事務	
S0013	事務協議会関係
S0200	内部監査
S0216	柏地区安全衛生管理
S0222	総合研究博物館運営委員会
S0289	外国人学生在籍状況調査
S0346	部局別職員組織状況表
S0347	名誉教授懇談会
S0348	防災対策委員会
S0369	外国学校等卒業学生特別選考
S0371	入試制度検討関係
S0383	柏キャンパス一般公開
S0441	定員削減
S0450	外国人留学生支援基金運営委員会
S0458	長期借入金関係
S0492	団体交渉関係資料
S0544	大学コンソーシアム東葛
S0549	定員貸借関係綴(過員承認)
S0645	国賓・公賓級外国人要人来訪受入
S0682	インフラ長寿命化計画
S0696 ★	推薦入試担当室会議
S0697 ★	推薦入試委員会
S0698 ★	情報基盤センター 学術情報電子化専門委員会
S0701 ★	業務改革推進活動

大学院・学部

S0234	教育学部附属中等教育学校時間割表
S0331	数理科学研究科 運営諮問会議
S0396	附属病院 執行諮問会議
S0445	教育学部・教育学研究科 学務委員会
S0454	経済学部 図書委員会
S0565	公共政策学教育部運営諮問会議
S0615	附属病院 医療情報システム
S0694 ★	経済学研究科 教育会議
S0695 ★	農学生命科学研究科・農学部 諸会議・委員会等名簿
S0699 ★	情報学環附属社会情報研究資料センター 運営委員会
S0700 ★	文学部・人文社会系研究科 東日本大震災対応

附置研究所

S0335	宇宙線研究所教授会
S0336	宇宙線研究所部主任会
S0337	宇宙線研究所 共同利用運営委員会・運営委員会
S0584 ★	物性研究所 企画委員会・主任懇談会

全学センター

S0423	東京大学総合研究博物館規則類
S0552	スーパーコンピューティング専門委員会
S0690 ★	総合研究博物館 予算配分

歴史資料等

総長資料

F0220	矢内原忠雄関係資料
-------	-----------

教員資料

F0006	坪井九馬三関係資料
F0264 ★	竹内松次郎関係資料

職員資料

F0288 ★	塩見弥一関係資料
---------	----------

学生資料

F0173	飯島正之助関係資料
F0260 ★	川口平一郎関係資料

関係団体資料

F0259 ★	大学記者会関係資料
---------	-----------

その他

F0284	大学関係記念品
-------	---------

上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌(抄)

(2022年8月～2023年1月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 8月1日 | シリーズ・システム研究会(オンライン) | 11月7日 | 産業医巡視(本) |
| 8月2日 | 元、研究調査出張(～8/5)
収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) | 11月8日 | 元、逢坂、OmekaS改修作業打ち合わせ(オンライン) |
| 8月8日 | NHKスペシャル「そして、学徒は戦場へ」放送(撮影協力) | 11月9日 | 森本、内閣府公文書管理委員会出席(内閣府) |
| 8月22日 | 森本、アーカイブズ研修Ⅰ出講(国立公文書館)
駒場寮同窓会より資料追加寄贈(F0160 駒場寮関係資料) | 11月10日 | 館長、担当課長、森本、監事と部局長とのディスカッション(本) |
| 8月23日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室勉強会参加(オンライン) | 11月11日 | 森本、千代田、総務課と文書管理打ち合わせ(本) |
| 8月30日 | 第90回館員打ち合わせ(柏)
シリーズ・システム研究会(柏) | 11月12日 | 逢坂、デジタルアーカイブ学会第7回研究大会一般研究発表(オンライン) |
| 9月2日 | 収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) | 11月14日 | デジタル・アーカイブリニューアル
森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
担当課長、森本打ち合わせ(オンライン)
逢坂、デジタルアーカイブ学会第7回研究大会サテライト企画セッション出席(オンライン) |
| 9月5日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン) | 11月15日 | 松井啓伊子様より資料寄贈(F0294 松井啓伊子関係資料) |
| 9月6日 | 伊藤敦子様より資料寄贈(F0296 伊藤新作関係資料、F0297 中野敬夫関係資料) | 11月16日 | 星野、アーカイブズ研修Ⅲ受講(国立公文書館、外交史料館。～17日) |
| 9月7日 | 元、総合研究棟建物管理専門委員会陪席(オンライン) | 11月17日 | 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オンライン)
森本、学術資産等アーカイブズ共用サーバ移行説明会参加(オンライン) |
| 9月9日 | 森本、第4回文書・図書・モノのリスト化検討WG出席(オンライン) | 11月18日 | 森本、アーカイブズ研修Ⅲ出講(国立公文書館) |
| 9月10日 | 元、逢坂、科研費関係出張(～9/11) | 11月21日 | 森本、研究倫理セミナー受講(オンライン) |
| 9月12日 | 秋山、濱田元総長インタビュー打ち合わせ(オンライン) | 11月24日 | 元、逢坂、デジタルアーカイブ学会第7回研究大会発表・参加(沖縄)(～11/27)
収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) |
| 9月13日 | 東京大学アルバム編集会より資料寄贈(F0271 東京大学アルバム編集会関係資料) | 11月29日 | 第93回館員打ち合わせ(柏)
シリーズ・システム研究会(柏) |
| 9月15日 | 元、逢坂、OmekaS改修作業打ち合わせ(オンライン) | 12月2日 | 元、科研費関係出張(～12/4) |
| 9月18日 | 元、研究調査外国出張(～9/25) | 12月6日 | 森本、科研費関係外国出張(～12/17) |
| 9月27日 | 第91回館員打ち合わせ(柏)
整理済み資料を移送(本→柏) | 12月9日 | 逢坂、東京文化財研究所文化財情報資料部訪問 |
| 9月30日 | 収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) | 12月12日 | 森本、文書・図書・モノのリスト化検討WG出席(オンライン) |
| 10月3日 | 森本、研究倫理セミナー参加(オンライン) | 12月13日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン) |
| 10月4日 | 活動制限指針のレベルをBからAに緩和
シリーズ・システム研究会(オンライン) | 12月14日 | 令和4年度内部監査 |
| 10月5日 | 防災訓練(柏) | 12月15日 | 秋山、札幌市公文書館研修出講(オンライン) |
| 10月7日 | 環境整備チームによる除湿機排水作業終了(柏) | 12月16日 | 業者による特定歴史公文書等概要調査に関する予備調査実施(柏) |
| 10月11日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
整理済み資料を移送(本→柏) | 12月19日 | 令和4年度第2回文書館運営委員会(オンライン)
阿部武司様より資料追加寄贈(F0161 阿部貞市関係資料) |
| 10月12日 | 森本、秋山、東大闘争資料収集委員会と寄贈協議(本) | 12月20日 | 秋山、濱田元総長インタビュー参加(百五十年史編纂室) |
| 10月13日 | 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オンライン) | 12月23日 | 元、第1回三重県公文書等管理審査会出席(オンライン)
整理済み資料等を移送(本→柏) |
| 10月14日 | 全書庫空調OFF(柏) | 12月27日 | 第94回館員打ち合わせ(本) |
| 10月15日 | 第21回東京大学ホームカミングデイ(オンデマンド)参加 | 12月28日 | 収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) |
| 10月17日 | 星野、アーカイブズ研修Ⅲ受講(国立公文書館。19、20日) | 1月12日 | 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オンライン)
森本、千代田、工学部へ資料確認(本) |
| 10月19日 | 秋山、濱田元総長インタビュー参加(百五十年史編纂室) | 1月13日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
東京芸術大学2名、来訪対応(本) |
| 10月20日 | 森本、アーカイブズ研修Ⅲ出講(国立公文書館)
令和4年度内部監査 | 1月17日 | 坂井修一附属図書館長資料調査・視察(柏)
元、逢坂、OmekaS改修作業打ち合わせ(オンライン) |
| 10月21日 | 柏キャンパス一般公開参加(オンライン)(～10/28)
森本、茨城県市町村公文書担当者研修会出講
事務室2台、書庫各1台のエアコン洗浄(本)
書庫の気温25度、湿度50%切ったため空調電源OFF(本)
本郷防災訓練(業務のため不参加) | 1月18日 | 森本、千代田、資産活用課資料調査(駒場) |
| 10月24日 | 森本、東京都公文書管理委員会出席(東京都庁) | 1月20日 | 森本、秋山、国立公文書館「准認証アーキビスト」骨子案に係る説明会出席(オンライン) |
| 10月26日 | 第92回館員打ち合わせ(本) | 1月23日 | 森本、法人文書管理説明会出講(本) |
| 10月27日 | 森本、秋山、全国史料協議会大会参加(～10/28)(オンライン) | 1月24日 | 第95回館員打ち合わせ(柏)
シリーズ・システム研究会(柏) |
| 10月28日 | 森本、ビジネス・アーキビスト研修講座出講 | 1月25日 | 森本、秋山、百五十年史編纂室資料調査同行(駒場) |
| 10月31日 | 収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) | 1月27日 | 収蔵庫防虫のためのエアローチ散布(本) |
| 11月2日 | 森本、南山学園南山アーカイブズ主催講演会講師(オンライン) | | |

文 書 館 ト ピ ッ ク ス

イギリスの医療アーカイブズを訪ねて

筆者は2022年12月6日から17日にかけて、科研費（挑戦的研究（開拓））「医療アーカイブズの構築と利用環境の整備に関する先導的研究—九州大学診療録を材料に」による海外調査に参加し、イギリスの基本医療費を無料とする国民保健サービス（National Health Service, NHS）の医療記録の保存活用状況を調査する機会を得た。主たる調査先は、ヨーク大学ボーズウィック・アーカイブズとエディンバラ大学附置ロージアン地区国民医療保健サービス・アーカイブズである。

NHSは国の制度であるため、その事業に伴い発生する文書は、国家公文書法（Public Records Act 1958）の規定に従い保存が求められる。そのアーカイブズとしての保存先は国立公文書館または法に基づき承認された施設とされており、NHSのような地域密着型事業の文書はそれぞれの地域の指定機関で保存されている。今回の調査先はその保存施設指定を受けたところである。が、同じNHSのアーカイブズを扱いながらも両館の考え方や運用は異なっており、興味深かった。

その違いとは例えば、イギリスではデータ保護法により個人情報とは生後100年間保護されるが、ヨーク大学ではその適用含めて医療記録でも他の文書と原則同様に扱うのに対し、エディンバラ大学では、研究利用が多く個人情報を含む資料提供は柔軟に行うが、そのぶん利用時の監視は厳しい（閲覧機の真上に監視カメラ！）、といった具合である。その背景には、イングランドとスコットランドで若干法律が異なるということもあるが、それよりも、ヨーク大学ではNHS記録は所蔵資料の一カテゴリーであるのに対し、エディンバラ大学はNHS記録専門のアーカイブズという違い、そしてそうした組織を反映して、ヨーク大学では一般的キャリアのアーキビストが配属されているのに対しエディンバラ大学では医療史を専門とするアーキビストが配属されている、という違いがある。どちらが正しいということではなく、各館のなりたちに応じた構成と運営なのである。

法制度の枠組みを現場にどう落とし込むか。そうした各館の判断を責任を持って明確に説明できるアーキビストたちに出会えたことも、このところ専門職の自律や倫理を考える機会の多い筆者には、収穫の一つであった。

（森本 祥子）



調査先のひとつ、スコットランド国立公文書館

東京大学文書館ニュース 第70号

ISSN 0915-3284

発行日：2023年3月31日（年2回発行）
編集・発行：東京大学文書館
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1
電話：03（5841）2077（直）
<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷所：松枝印刷株式会社